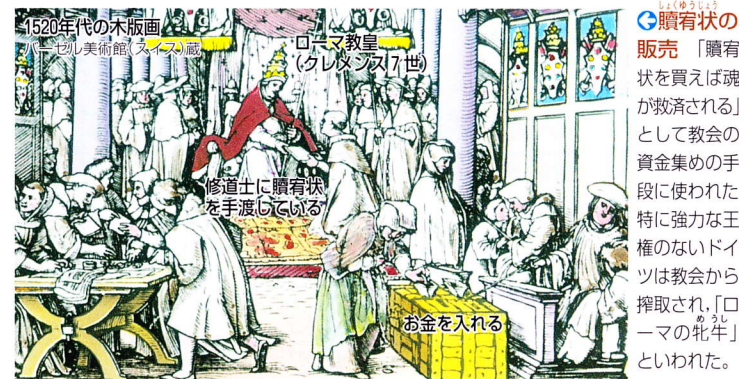
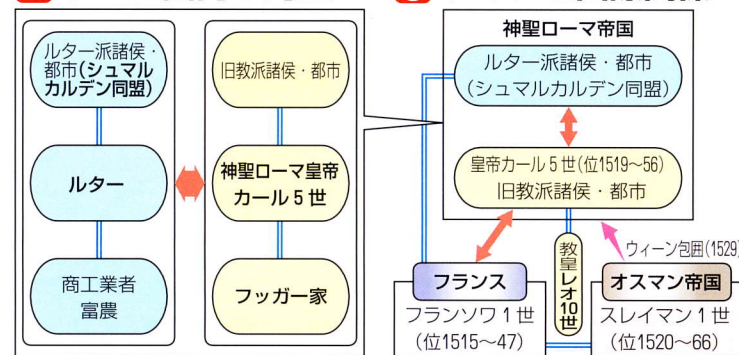


1 宗教改革の経過と内容 (P123頁)

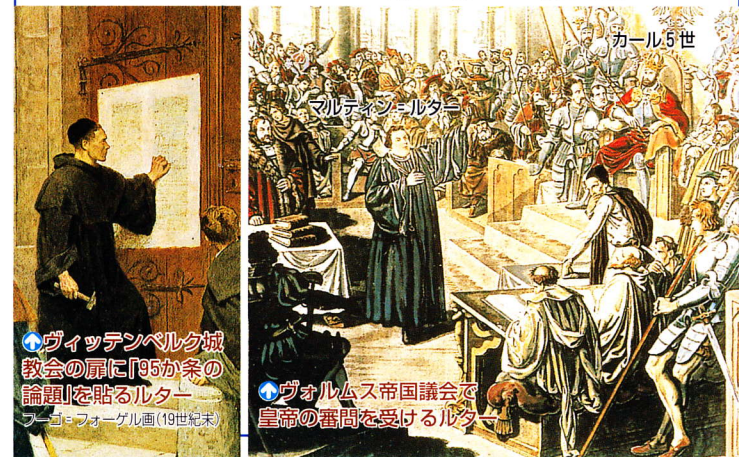
宗派	カトリック(イタリア)	ルター派(ドイツ)	カルヴァン派(スイス・フランス)	イギリス国教会(イギリス)
背景	1414~18 コンスタンツ公会議(フスの火刑, 教会大分裂に終符) 1419~36 フス戦争 1494 サヴォナローラの教会批判「虚栄の焼却」→ 1498 火刑	1403 フスの教会批判 1419~36 フス戦争 マルティン・ルター	1523 ツヴィングリ, チューリヒで宗教改革を始める	1378 ウィクリフの教会批判 1381 ワット・タイラーの乱(ジョン・ボールの指導) 1521 ヘンリ8世, マルティン・ルター非難(「信仰擁護者」の称号を受ける)
経過	レオ10世 1520 教皇レオ10世, マルティン・ルターを破門 1534 イエズ会, パリで設立(ロヨラ, ザビエル) 1540 イエズ会, ローマ教皇による承認 1545~63 トリエント公会議 反宗教改革始まる(皇帝カール5世の要請に従い, 教皇パウルス3世が召集)	1517 ルター, 「95か条の論題」発表(宗教改革開始)(P241頁) 1519 ライプチヒ討論 1521 ヴォルムス帝国議会 1522~23 騎士戦争 1524~25 ドイツ農民戦争(ミュンツァーの指導) 1526 第1回シュバイエル帝国議会(皇帝, ルター派布教承認) 1529 第2回シュバイエル帝国議会(皇帝, ルター派禁止) 1530 シュマルカルデン同盟成立 1546~47 シュマルカルデン戦争 1555 アウグスブルクの宗教和議(諸侯・都市に信仰選択の自由, ルター派のみ承認) 1618~48 三十年戦争	カルヴァン 1536 カルヴァン, バーゼルで『キリスト教綱要』を発表 1541 カルヴァン, ジュネーブで改革を行う(神政政治, ~64) 1562~98 ユグノー戦争 1572 サン=バルテルミの虐殺 1598 ナントの勅令	ヘンリ8世 1527 ヘンリ8世, 王妃カザリンとの離婚問題から教皇と対立 1534 首長法制定発布 イギリス国教会成立 1536/39 修道院解散・土地没収 1549 エドワード6世, 国教の新教化推進 1555 カトリックに復帰(メアリ1世) 1559 エリザベス1世, 統一法制定発布, 国教会確立 1572 信仰簡条制定 1593 国教忌避者処罰法制定
教義	● 聖書と伝承を重視 ● 教皇至上主義 ● 教皇無謬説 ● 善行による救済	● 義認説(人は信仰によってのみ義とされる) ● 聖書主義 ● 「キリスト者の自由」	● 予定説(人が救われるか否かは予め神が定めている) ● 徹底した聖書主義 ● 「キリスト教綱要」	● 教義にルターやカルヴァンの説を取り入れているが, 儀式はカトリックと大差がない
教会	普遍教会・聖職者階層制度 教皇 枢機卿 大司教 司教 司祭 信者	領邦教会制度 領邦君主(最高の司教) 牧師 信者	長老制度 長老(信者代表)・牧師 監督 選出 信者	国家教会主義 国王 カンタベリー大主教 主教 司祭・執事 信者
社会観	● 政教一致 ● 正しい政治・社会は正しい信仰の上のみ築かれる	● 政教分離(信仰を内面の問題とする) ● 君主権・身分・秩序を容認し現状肯定	● 政教一致 ● 共和主義的神政政治を主張	● 政教一致 ● イギリス国王が首長 ● 教会は国家の監督支配下
職業観	● 世俗職業, 特に商業・高利貸などを蔑視	● 世俗の職業も司祭職と同じく尊重(職業神授説)	● 禁欲と勤勉を奨励(職業倫理) ● 蓄財を肯定	● 新旧両派の中間的なもので, 特別の関心なし
支持層	教皇・皇帝派	反教皇・反皇帝派の諸侯と自由都市, 富農・富裕市民	新興市民階級・知識階級	貴族・大商人・ジェントリ・保守的農民
伝播	アジア・アフリカ・中南米	北ドイツ・スウェーデン・ノルウェー・デンマーク	フランス(ユグノー) オランダ(ゴイセン) イングランド(ピューリタン) スコットランド(プレスビテリアン)	イングランド
要点	● トリエント公会議で, 教皇至上権, 教会内部の肅正, 宗教裁判の強化, 禁書目録制定などを決める ● 厳格な組織(イエズ会など)で布教活動を推進	● 信仰至上主義. 信仰面・精神面のみを強調 ● ドイツ農民戦争では, 改革が社会変革に及ぶことを否定(ルターの改革の限界)	● 蓄財の肯定は, 新興市民階級の要望と合致 ● 資本主義社会の形成・発展に貢献(マックス・ヴェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」1904~05)	● ヘンリ8世が王妃離婚問題をきっかけにおこした改革 ● 政治的性格が強く, 国家教会主義の典型

2 ドイツ国内の対立

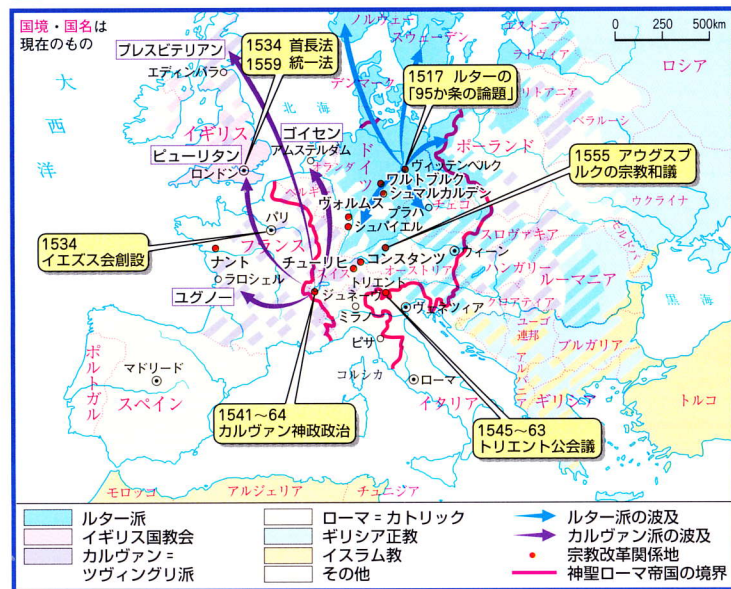
3 ドイツと国際関係



**意志の人 マルティン・ルター (1483~1546)**  
 ザクセンの鉱山経営者の子に生まれたマルティン・ルターは, ドイツで最も名門とされていたエルフルト大学で法学を学んだが, 突然両親の期待に背き修道院に入って求道生活をし, 1512年ヴィッテンベルク大学の神学教授になった。贖宥状の販売に対し, あくまで信仰上の疑問として「95か条の論題」で批判したことが大反響を招き, ライプチヒ討論で教皇の権威を否定して全面対立となった。教皇の破門宣告や皇帝の圧迫にも「良心に背くことはできない」として屈せず, ザクセン選帝侯フリードリヒの保護で聖書のドイツ語訳も完成させた。

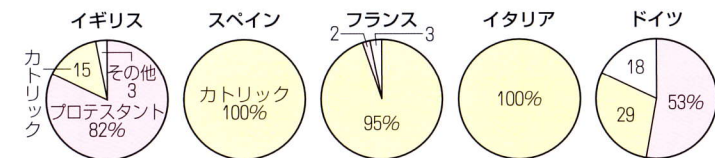


## 4 宗教改革後の宗教分布(1560年頃)



### 現在の宗派分布

(『世界キリスト教百科事典』教文館)



## 5 反宗教改革(対抗宗教改革)



↑イグナティウス=ロヨラ(1491頃~1556)スペインのバスク出身。1534年、パリでイエズスを創立。

↑フランシスコ=ザビエル(シャヴィエル)(1506頃~52)スペインのバスク出身。ロヨラとともにイエズスを設立した。東方伝道のため、1542年以降、インド・東南アジアで布教。1549年、鹿児島に上陸、初めて日本にキリスト教を伝えた。(神戸市立博物館蔵)



### おもな公会議(宗教会議)

公会議名	開催年	要請者・召集者	内容
ニケーア公会議 (P361年, 371年)	325	コンスタンティヌス帝	アタナシウス派を正統アリウス派を異端
エフェソ公会議 (P371年)	431	テオドシウス2世	ネストリウス派を異端
クレルモン公会議 (P1181史)	1095	ウルバヌス2世	聖地奪回のための十字軍提唱
コンスタンツ公会議 (P1203)	1414~18	ジギスムント帝	フスの火刑・教会大分裂の終結
トリエント公会議 (P1341年)	1545~63	カール5世	教皇の無謬性・至上性の確認

## 6 宗教戦争

戦争	ユグノー戦争(1562~98) (P1411年)	オランダ独立戦争(1568~1609) (P13811年)	三十年戦争(1618~48) (P1423)		
原因	フランス国王シャルル9世の母后カトリヌの宗教政策とギーズ公のユグノー殺害	スペイン国王フェリペ2世のネーデルラントへの旧教強制に対するゴイセンの蜂起	国王(後の独皇帝)フェルディナント2世に対するベーメン(ボヘミア)新教徒の反乱		
経緯	ユグノー派諸侯 イギリス	旧教派諸侯 スペイン	新教徒(ゴイセン) イギリス	新教徒・諸侯 デンマーク スウェーデン フランス	神聖ローマ帝国 スペイン
経過	1572 サン=バルテルミの虐殺 1589 ヴァロワ朝断絶、ブルボン家のアンリが即位(アンリ4世)	1579 南部10州(現ベルギー)の離脱と北部7州によるユトレヒト同盟の結成 1581 オランダ独立宣言(総督オラニエ公ウィレム)	1632 スウェーデン王グスタフ=アドルフ、リュッツェンで戦死 1635 旧教国フランスの新教徒への参戦		
終結	ナントの勅令(1598)でユグノーに信仰の自由と市民権を承認	休戦条約(1609)により事実上の独立 正式承認はウエストファリア条約(1648)	ウエストファリア条約(1648)で諸侯・自由都市単位でのカルヴァン派の公認(神聖ローマ帝国の分裂が進む)		

↑解説 宗教戦争は、政治的要因が複雑に絡み合う場合が多い。特に上の3つの戦争は、中産市民層と絶対王政との戦いというよりも、当時西欧で大きな勢力を誇ったハプスブルク家をめぐる国際戦争の性格が強い。



↑サン=バルテルミの虐殺 ユグノー戦争中の1572年、ユグノーのリーダー、ナヴァル王アンリ(後のアンリ4世)は国王シャルル9世との和解として王の妹マルグリートと結婚した。8月24日、ユグノーの台頭を恐れた王の母后カトリヌとギーズ公は、結婚の祝福のために全国からパリに集まったユグノーの貴族を不意打ちし、約3000人を虐殺した。これを機に、ユグノー戦争はより激化した。

ドイツのバルツ地方での魔女狩り(1555年の木版画ビラ)



↑魔女狩り ルネサンス期のヒューマニズムに基づく近代個人主義精神に助長され、宗教改革は進展し新旧両派の対立も激化した。そして宗教裁判の一つである魔女狩りもピークを迎えた。男女を問わず密告や噂で魔女として告発し、拷問により魔女との自白を強要し処刑した。16~17世紀に約900万の人々が虐殺された。

### ローマ=カトリック教会の今昔

宗教改革により勢力が縮小したカトリック教会だが、イエズス会などの活動によりドイツ西南部を奪回、ポルトガル・スペインの植民活動によりアジア・アメリカへ勢力を拡大した。現代のカトリック教会は時勢に合う柔軟な姿勢をもち、教皇ヨハネス=パウロ2世(位1978~)は、イギリス・ロシア・イスラエルなどの非カトリック教国との協調のため、積極的に活動している。↑ゴルバチョフソ連書記長(左)と



1989年12月1日。ヴァチカン帝国にて